

マルティーニ枢機卿死去

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

1927年にイタリアのトリノに生まれたカルロ・マリア・マルティーニ枢機卿が、2012年8月31日午後3時45分に亡くなった。枢機卿は1952年7月13日、トリノで司教に任命される。1980年1月6日には、法王ヨハネ・パオロ2世によってミラノの大司教に任命される。1983年2月2日には、同じく法王ヨハネ・パオロ2世によって枢機卿に任命される。そして2002年から2007年までイスラエルのエルサレムに住み、2008年から亡くなる当日まで、ミラノの西、バレーゼ市のイエズス会施設ガッララーテのアロイジアヌムに住んでいた。享年85歳。

枢機卿は若くしてその才能と信仰を認められ出世した。全ての課題に全身全霊を打ち込み、多くの人から共鳴を得た。早くから、世界の宗教者との対話の開始を主張し続けていた。1994年に枢機卿は、世界の宗教の代表者をミラノに招待した。その時には天理教からも、その当時の森井敏晴ヨーロッパ出張所長を団長として他4名が参加した。枢機卿は精力的に各会場に顔を出し、カソリック教会の懇親なる人々と接触したのみならず、他の宗教の代表者たちとも積極的に話し合い、交誼を深めていった。また、各食事の折にも必ず食堂に姿を現し、参加者の一員として、我々と一緒に食事をし、いろいろと語り合った。そうした姿から、それぞれの宗教を超えて、多くの人との友情が芽生えた。これこそ「世界の宗教者の平和の祈りの集い」の大きな成果の一つであると考えられている。枢機卿はすべての人に、つまり神を信じる人にも神を信じないと選択した人にも、精神的な無形の財産を残した。信じる人々にも、信仰に対する反省が、今日の我々の時代に大事なことだと語っている。

枢機卿は、我々の理性が信ずることのできるものについて、問いを発することもでき、新しく幅広い地平線を提供できるとも言うのだ。人々についての善悪の判断を放棄し、いかなる人とも話し合った。ミラノで「信じない」人にも教会を開放したのは枢機卿だ。今の時代には信じることが難しく、無神論を説く人もいる。そういう人をも教会に呼び寄せ、神を知らないという彼らの論調を聞くのも大事なことだと説いた。

諸問題にも意見を述べていた。「若者の教育」、「この30年間のイタリアの国難」、「市民社会と共同体の役割」、「ヨーロッパ統一の価値」、「停まった後また起動するために必要な魂の力」などの問題に卓見を披露していた。

イエズス会の同士でスポルスキリ神父とラディーチェ女史は、2012年8月8日にマルティーニ枢機卿に会い、インタビューをしている。

Q. 教会の現況をどうみるか？

A. ヨーロッパやアメリカの繁栄の中で教会は疲弊している。我々の文化は古くなった。我々の教会は大きくなったが、その中は空になり、官僚的機構で縛り付けられている。我々の儀式、式服は華美になりすぎている。

Q. 今日の教会は誰がたすけられるのか？

A. 今の教会は、真っ赤に焼ける肉が灰の下に隠れているようなものだ。百人隊長のような信仰は誰が持っているか。洗礼者ヨハネのように澆刺としているか。パオロのように振る舞えるか。マグダラのマリアのように信仰を表に出せるか。今私

たちは初期の信仰者の純粹さに戻らなければならない。

Q. 教会の疲弊に対していかなる特効薬があるか？

A. それには三つある。一つ目は、転換。教会は過去の過ちを認めること。改革の道を歩むこと。小児性愛症の根絶。性的問題の改革。今の教会の説くところで性的問題は解決するのか。それに対して教会は役割を果たせるのか。二つ目は、神の言葉。第2ヴァチカン公会議は聖書をカソリック教徒に戻した。神の言葉を心に聞き分けるものは教会の改革に寄与するであろう。神の言葉は易しいし、神は常に聞く者を探している。三つ目は、救済。 sacramentは規律のための道具ではない。人生の歩みの中で痛みの時にたすけるものだ。離婚者や再婚者についてもっと考えるべきだ。

Q. あなたは個人的に何をなさいますか？

A. 教会は200年前の状態に留まっている。なぜ揺り動かさないのか。我々は恐れているのか。真の信仰は教会の基礎である。信仰、信念、勇気を持つこと。愛はすべてに勝つのだ。神は愛である。

1983年2月に枢機卿となったマルティーニは、法王選出のコンクラーベといわれる選挙に参加できるようになり、法王に選ばれる可能性も高まった。特に、1980年代後半から1990年代前半には、次期法王はマルティーニと取り沙汰されていた。しかし、前法王ヨハネ・パオロ2世が長生きしたので、その機会を失ってしまった。1995年にはパーキンソン病にかかり、17年間その病と闘ってきた。前法王が亡くなったのが2005年4月2日だった。その後、コンクラーベが開かれ、19日に現法王ラッツィンガーが選ばれ、ベネディクト16世と名乗り、法王に就任した。結局、マルティーニがコンクラーベに出席できたのは、この2005年の時の1回だけだった。このコンクラーベにおいて、教会の行く末を憂慮していた78歳のマルティーニは、相談役のような役割を持って5分間の演説をした。その中で皆の注意を喚起するために二つのことを語った。一つは一般的なことがらで、福音化事業の位置づけ、エキュメニズム、貧困者と平和等の問題。もう一つは、特別問題だ。教会の全領域で発展させる聖堂参事会付き教会、生命倫理、家族、性に関する事柄だ。さらに家族問題、性的問題について、人々に、特に若者に新しい言葉で語ること、特にヨーロッパにおいて教会が若い層全体を失う危機に直面していることなどを語った。

マルティーニ枢機卿の遺体は、ミラノのドゥオーモの左奥に安置され、9月1日より9月3日午前11時45分まで一般の甲間を受けた。最後の別れを言葉に表し、また棺の前で十字を切り、甲間に訪れた人は20万人を数えた。教会の扉は夜も開放され、棺の前に到達するのに平均して1時間30分を要したが、人々は大人しく列に並んでいた。

枢機卿の葬儀は、9月3日午後4時より執り行われた。教会前の広場には13,000人が参集。教会の中に入れた人が6,000人。そのうち、枢機卿が12名、司教が38名だった。特筆すべきは、サン・ヴィットーレ刑務所の服役者17名が参列していたことだ。式が終わって、参列者が教会を出て行き、その後枢機卿の妹、甥、姪の目の前で教会の中の左側に葬られた。